

平成三十年夏の收穫（乾）

土屋 博

I 第二十七回東急東横店澁谷大古本市關係

初日、二日目及び最終日に赴く。小生の求むる明治・大正期の書籍の出品は減少傾向にあるものの、質的に満足の行く收穫となれり。

一「今古三十六名家文鈔 上中下」

（出版人大阪府平民前川善兵衛、明治十二年刊）

古書價格三千二百四十圓也。和綴、三卷を絲にて一冊に綴じたる形狀にて、大阪府平民寺倉梅太郎撰評。藤澤南岳閣。藤原惺窩、伊藤仁齋、荻生徂徠、室鳩巢、太宰春台以下、塩谷青山先生までの三十一名の名文茲にあり。頼山陽の作品よりは、孟子論、宋論、讀史記など收録せらる。

二「冠註挿畫 日本政記字類大全 上下」

（出版者東京府平民山中喜太郎ほか、明治十八年刊、定價金七拾五錢）

古書價格千二百圓也。編輯者東京府士族齋藤實。凡例に曰く、「此書素と幼童子弟の爲めに設け専ら簡易にして讀み且つ解し難からざるを要す故に全面より視れば或は體裁の整はざるものあらん、看者惟其意の存する所を取り體面の不整を咎むる勿れ」と。

三「雪案螢窗 自修新美文」小宮水心著

（此村欽英堂、大正八年十四版、定價金壹圓拾錢・郵税金八錢）

古書價格三千圓也。天金。初版は大正二年。作例は春夏秋冬及び雜の五部門とせらる。「嬉しき元日」の作例より、「一家異なう迎へし初春、わが 大君の萬歳を祝ひ奉るは言ふにや及ぶ、父上母上の御機嫌能きお顔拜するも又なく嬉し」と。

四「山陽先生の幽光」光本鳳伏口述、山崎南岳筆記

（藝備日日新聞社、大正十四年刊、定價金六圓、九一四頁）

古書價格二千五百圓也。光本鳳伏自序に曰く、「頼山陽先生の學、文、詩は及ぶ可き也。されど先生の氣節及び忠孝は及ぶ可からざる也」と。本書は藝備日日新聞上に大正十二年一月一日より三百餘日に亙り連載せられたるものなれば讀み易し。「幽光」なる語は、日本外史例言の「以發幽光耳」に由來する由。

五「國民教訓 東郷元帥の言葉」

（軍事教育社、昭和八年刊、定價金參圓、特價金壹圓九拾錢、本文三四一頁）

古書價格千圓也。日本海海戰直前に部下に與へたる訓示より、「すでに合戦するに當りては、又防禦を言ふの要なし。積極の攻撃は最良の防禦なり」と。また、米國新聞記者のインタビュに應じて、「婦人が徒らに家庭や子供を他所にしてする仕事は、何によらずよいものではない」と。また別の機會に曰く、「皆んなが都會に出て來てウヨウヨして居るから、遂に食ふに困るやうになる。皆んなが田舎に歸つて百姓でもすれば、食つて行く位のことは何でもない筈だ」と。元帥の聲咳、見事に活写せらる。

六「日本外史新釋」島田鈞一著

（有精堂、昭和十四年七版、定價金貳圓拾錢、六二七頁）

古書價格二千圓也。初版は昭和十二年。著者は一高教授。三度目の購入なり。（昭和十五年版、昭和

三十五年版に次ぐ。)

七「追想 海軍中將中澤佑」

(水文會内刊行會、昭和五十三年刊、非賣品、二五六頁)

古書價格二千圓也。役所の先輩中澤忠義氏の御尊父を偲ぶ書籍なれば購入す。佑中將、海兵四十三期なれば、家内の祖父吉見信一(元海軍少將)と同期に當る。追悼文中に愛甲文雄氏(愛甲次郎氏の御尊父。海兵五十一年期)の「母逝去の際、戴いた懇書」なる一文を発見す。昭和五十二年十二月二十一日に逝去せられたる佑中將の同年十二月一日付手紙についての話題なり。

八「評傳 大町桂月」高橋正著

(高知市民圖書館、平成三年刊、定價三千三百圓、本文三〇九頁)

古書價格二千圓也。著者は一九三一年生れ、高知大學を卒業せる高知工專教授なり。全國知事會にご臨席の明治天皇より青森県知事武田千代三郎に十和田湖の景觀につき突然御下問ありたるは、天皇も桂月の紀行文の隠れたる愛讀者の一人なることを示すエピソードなりきとぞ。

(平成三十年九月八日受附)